ラディカル・エコロジー
８章　エコフェミニズム　プレレジュメ

笠原・高木・高橋・勝亦

私たちは、『第８章　エコフェミニズム』を扱います。
著者キャロリン・マーチャント含め、エコフェミニストたちは、女たちが自然を救う力になることを期待します。著者は、エコフェミニズムを４つに分類しています。それぞれ、どのような思想・活動の下で自然を救おうとしているのでしょうか。

そこで、みなさんに考えて欲しいことがあります。

「リベラル・エコフェミニズム」、「カルチュラル・エコフェミニズム」、「ソーシャル・エコフェミニズム」、「ソーシャリスト・エコフェミニズム」、以上４つの類似点と相違点を整理してきてください。

以下には、この章の概要として、p255 までの要約を載せておきます。
以下の内容は前提知識として発表をする予定です。よく頭に入れておいて下さいね。

■エコフェミニズムの誕生
1970s
女と自然との結び付きの意識が強まることで誕生。

1974
フランソワーズ・ドボンヌ（仏）
女たちにエコロジカルな革命を呼びかける。

■４つのエコフェミニズム
人間と自然の関係性の改善に関心

【リベラル・エコフェミニズム】
現存の統治機構の内部から、新しい法律や規則を成立させる。

【カルチュアル・エコフェミニズム】
女と自然の両方を解放することの可能な社会像を提出する。

【ソーシャル・エコフェミニズム】【ソーシャリスト・エコフェミニズム】
男による女の支配、男（人間）による自然の支配を徹底的に批判し、
解放的な社会正義を可能にする。

■生産と再生産の矛盾
生物学的再生産の危機
〔生産の攻撃〕原子力発電事故による放射能
〔再生産の危機〕人間という種の生殖

社会的再生産の危機
〔生産の攻撃〕産業による汚染物質
〔再生産の危機〕日常生活の継続

■世話の倫理
カレン･ウォレン
「エコフェミニズムの観点」
①多元主義的
②包括主義的
③コンテクスト依存的
→男性支配を批判するため、人種、階級、年齢、エスニックな特徴から見て、
異なる位置を持つ女たちの多様な声を、中心に据える。

「エコフェミニズムの倫理」
伝統的倫理に加え、世話、愛、信頼に基づく考慮によって制約を加える。
→世話の倫理は、本質主義者の批判の餌食になる。

■共生・協力の倫理
①人間と人間における「共生・協力の倫理」
・人間のパートナーを平等に扱う。
・人間のパートナーが･･･互いに空間、時間、世話を与え合い･･･一人一人独自に成長し発達することを認め合う。

②人間と自然における「共生・協力の倫理」
・人間と人間以外の自然を対等なパートナーとして扱う。
・人間は人間以外の自然に空間、時間、世話を与え、自然が繁殖し、進化し、そして人間活動に応答することを認める。
i)「自然の災害」による被害を受けやすくする開発を行わない。
ii)予測できない、自然の不意打ちの余地を認める。
iii)新しいテクノロジーをエコシステムの中に導入することに倫理的制限を加える。

■共生・協力の倫理の利点
自然をパートナーとして構築する

・自然との個人的・人格的・あるいは親密な（といっても必ずしも宗教的とは限らない）関係性を考慮に入れる
→スピリチュアル・エコロジーに偏らない。
・人間以外の自然に対する共感・思いやりの感情を考慮に入れる
→ディープ・エコロジーに偏らない。